

平成28年11月19日(土)

へいあんきょうあと

# 平安京跡(平安京左京一条三坊二町) 現地説明会資料(2)

調査場所 京都市上京区下長者町通新町西入藪ノ内町42番地

調査期間 平成27年9月1日～平成28年12月下旬(予定)

公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター  
〒617-0002 京都府向日市寺戸町南垣内40-3  
URL <http://www.kyotofu-maibun.or.jp>

## 1. はじめに

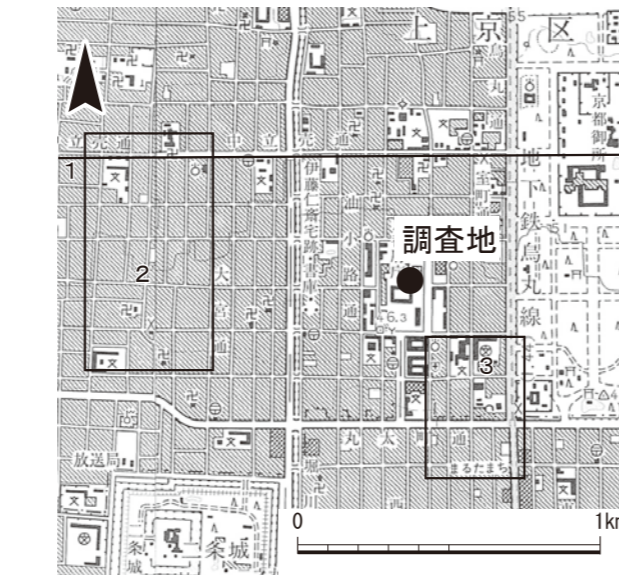
今回の発掘調査は、京都府警察本部新庁舎建設工事に先立ち、昨年度から継続して実施しています。

調査地は、平安京跡左京一条三坊二町にあたります。昨年度南側で実施した調査では、平安時代の柱穴や土器・瓦、室町時代の町屋に伴う柱穴、溝、土坑、安土桃山時代の聚楽第に伴う大名・武家屋敷地に伴う柱穴・土坑や金箔瓦、江戸時代の町屋に伴う遺構・遺物などが見つかかり、現地表下約50～70cmで守護職上屋敷の建物跡を確認しました。その成果については、平成28年4月29日に行った現地説明会で報告しました。

## 2. 調査の成果

現在、調査対象地の南側の調査を終了し、北側の調査を実施しています。今回の調査では、平安時代後期から江戸時代初頭の柱穴、土坑、溝、石室など数多くの遺構がみつかっています。そのうち、特徴的な戦国期(室町時代後半)の堀について述べます。

**堀1** 調査区の東側でみつかった南北方向の堀です。幅2.4m、深さ1.1mを測ります。調査区を南北に縦断し、調査が終わった南側の堀と合わせて約44m分を確認しています。出土遺物から16世紀前半に埋まったとみられます。堀の東側では土塀とみられる布掘りの柱穴群からなる堀1がみつかりました。



第1図 調査地位置図  
(国土地理院 1/25,000 「京都西北部・東北部」)  
1. 平安京跡 2. 聚楽第跡 3. 旧二条城跡

**堀2** 調査区の北側でみつかった東西方向の堀で堀1埋没後に掘られています。幅約5m、深さ約3.5mもある大きなものです。調査区の北を通る下長者町通(鷹司小路)と平行して直線に伸び、約75m分を確認しました。さらに東西方向に伸びていきます。堀に付随する土塁や柵などは確認できていませんが、北側から短期間で埋められていることから、堀を掘削する際に出た土砂を用いて北側に土塁が築かれていた可能性があります。出土した遺物は少量で掘られた正確な時期はわかりませんが、16世紀後半には機能していたことがわかっています。

また、堀2埋没後に掘られた瓦廃棄土坑や堀北側の穴からは、堀の埋没後に造営された大名屋敷に伴うと考えられる金箔瓦が出土しました。

## 3. まとめ

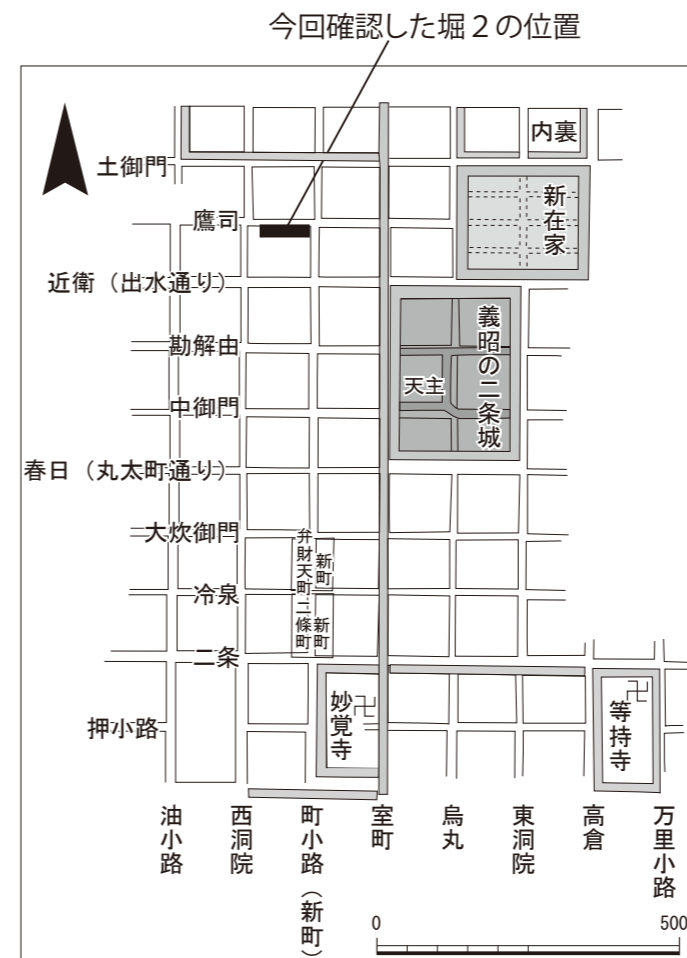
今回の発掘調査では2条の堀を確認しました。その規模・構造などから、用排水に使用された溝ではなく、室町時代につくられた構の堀と考えられます。

戦国期(室町時代後半)の京都は応仁文明の乱(1467-1477年)以降、度重なる戦乱により都市部を縮小し、上京と下京に分かれ、それぞれが「構」とよばれる堀や塀などによる自衛のための防御施設によって囲われ、室町通によって結ばれていたと考えられています(第2図)。また、町々の間や、社寺にも構の堀や塀が巡っていました。その様子は当時の京都を描いた

「洛中洛外図屏風」などからうかがう事ができます。

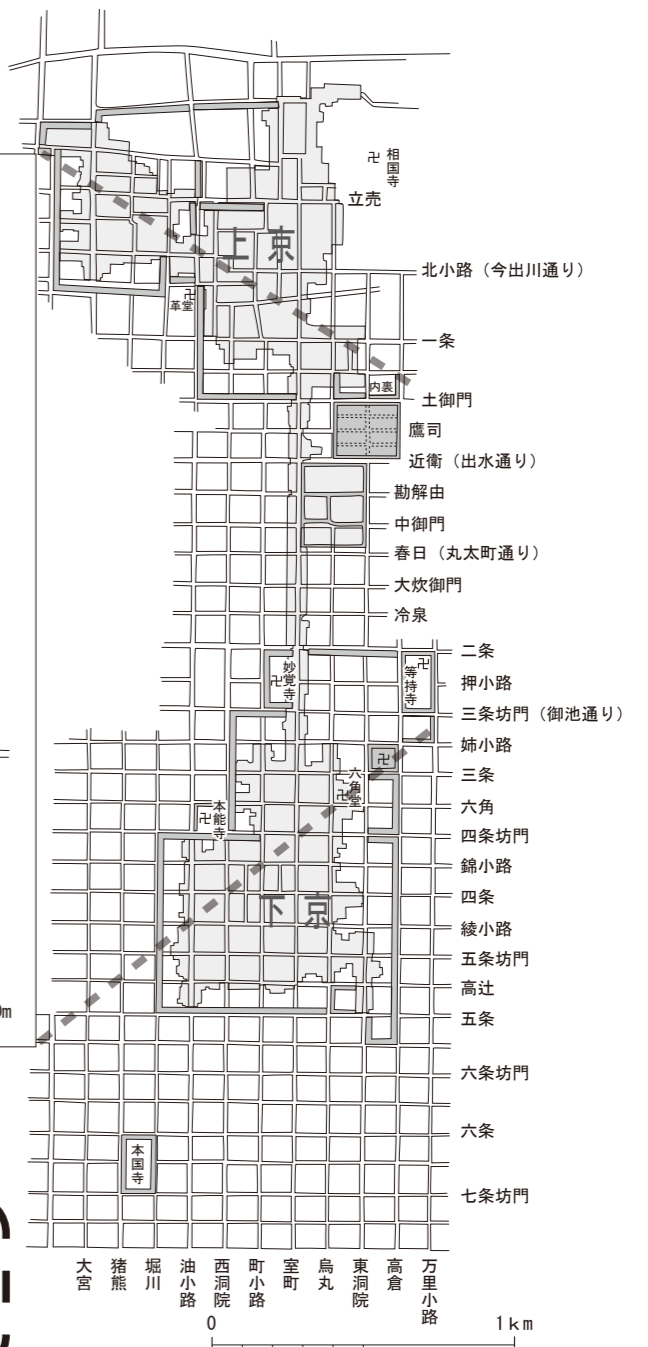
堀2は、北側に土塁が想定されることと、これまで発掘調査によってみつかった構の堀の中でも大規模なものであることなどから、上京を囲ったいわゆる「惣構」の堀の可能性があります。堀は16世紀後半には機能していますが、秀吉により、調査地周辺が大名屋敷地へと整備される際に埋められたと考えられます。

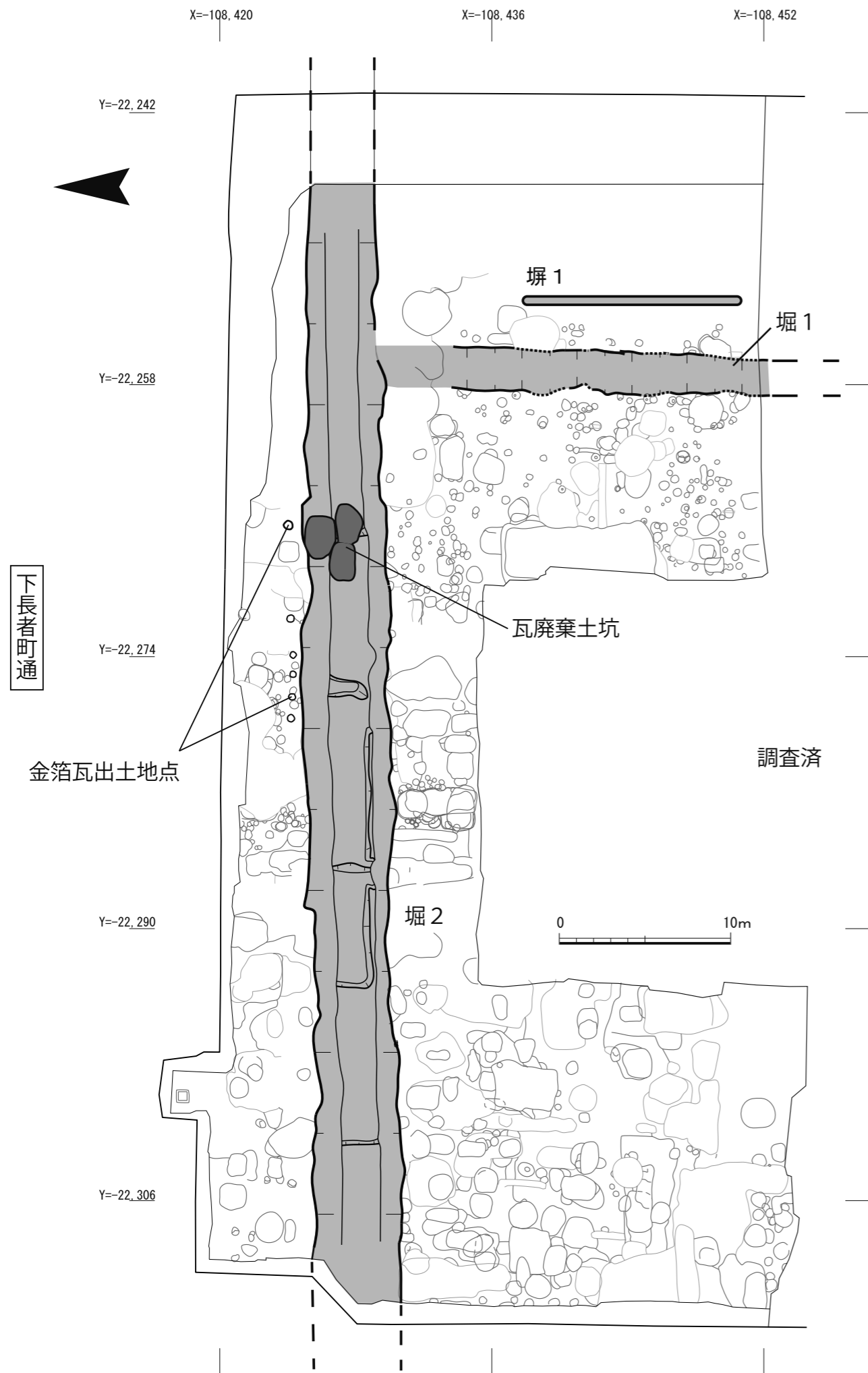
今回みつかった構の堀は、戦乱に備えた戦国期京都の都市の姿を具体的に知ることができる資料といえます。



第2図 織田信長期の京都  
(マシュー・スタブロス作成  
高橋康夫『海の「京都」-日本琉球都市史研究』を改変)

**注**  
構(かまえ) 堀や土塀などで敵の侵入を防止するための施設、または防御施設に区切られた区画全体のことを指します。町の外周を取り囲む構を惣構(そうがまえ)と呼びます。





第3図 調査地遺構平面図



写真1 調査地全景 (西から)

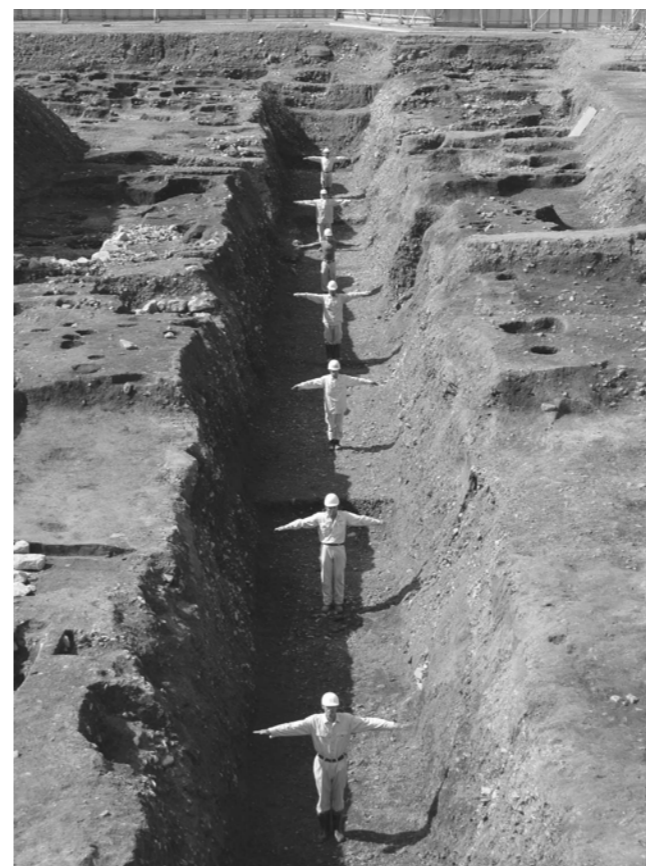


写真2 堀2 (東から)



写真3 堀2堆積の様子 (東から)  
・北側 (写真右) から埋められたことがわかります。



写真4 金箔瓦出土状況 (南東から)